九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

奥村三雄著『波多野流平曲譜本の研究』

迫野, 虔徳
九州大学文学部助教授

https://doi.org/10.15017/11979

出版情報：語文研究. 62, pp.87-90, 1986-12-10. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

《紹介》

奥村三雄著『波多野流平曲譜本の研究』

迫野虔徳

平曲譜本の国語学的研究に優れた業績を次々に示されている著者が、先の『平曲譜本の研究』(昭56　桜楓社)につづいて、今回また、標題のような大著を加えられた。著者の発見になる山口県立図書館蔵の『秦音曲鈔』を中心にして、波多野流平曲についての従来の蒙昧を一挙に開こうとした意欲的な著作である。従来、「波多野流平曲はいずれも同文同譜」とする説が一般におこなわれていたわけであるが、山口県立図書館蔵の『秦音曲鈔』は、波多野流古譜本ながら、一般に知られているいわゆる波多野流譜本とは相当に異っている。著者はこれを波多野流譜本の古態と位置づけ、従来の説の訂正されるべきことを主張される。そして、これをもとに、波多野流譜本の史的変遷をたどると共に、前田流への影響関係もあわせ検討されて、平曲における波多野流のもつ史的意義の全的解明をめざしておられる。従来の前田流を中心とした平曲研究の欠を補うというだけでなく、近世平曲史に新しい展望を与える革新的気に満ちた著作ということができよう。

本書は、第一部「研究編」第二部「秦音曲鈔影印編」の二部からなっている。第一部の目次は次のとおりである。

第一章　波多野流平曲とその譜本—秦音曲鈔を中心に—
一　はじめに
二　波多野流平曲の展開
三　波多野流譜本の多様性
四　波多野流古譜本秦音曲鈔
五　秦音曲鈔と平家語本
六　まとめ—資料編—
第二章　国語学資料として見た秦音曲鈔
一　音韻史料として見た発音注記
二　清ム注記
三　その他の諸注記
四　アクセント史料として見た譜記
第三章　波多野流譜本の史的変遷
一　いわゆる波多野流諸譜本について
二　波多野流古譜本—山口本小秘事を中心に
三　波多野流譜本の史的変遷と節名目
四　波多野流本と流布本平家物語
五　初期波多野流における曲節改訂
六　初期波多野流平曲の盛況
第四章　波多野平曲と前田流

一 荻野検校と波多野流秘事物
二 波多野流譜本と平家正節
三 波多野流譜本と前田流平曲

波多野流とその譜本については、もちろん前著『平曲譜本の研究』にも相当詳細な記述があるわけであるが、前著が前田流を中心にして、それとの関係において述べられたのに対して、ここではそれを正面にすえて組織的に論じようとしたものである。

第一章「波多野流平曲とその譜本」は、その副題にあるように、著者によってあらたに見出された山口県立図書館蔵『秦音曲鈔』について、その性格と史的意義を解説する。この譜本は、「いわゆる」波多野流譜本からすると特異性が目立つが、波多野流に属するものであることは間違いない。そのことを、句の配置、節ハカセ、曲節表示、本文詞章など多方面から手固く論証される。「秦音」という書名からしても、このことは、まず疑問の余地のないこととみてよいようであるが、そうであるとすると、平曲の、とりわけ波多野流の史的展開の上からは、この譜本はきわめて注目される文献ということになる。従来、波多野流譜本は、いずれも同文同譜、譜本間にほとんど変動がみられないというのがいわば常識視されてきたのに対して、波多野流の譜本に多様なものがありうることを指摘することになり、波多野流の展開史の上から大いに注目されるのである。

しかも、この特異な波多野流譜本は、ひとり『秦音曲鈔』だけに限らず、同趣のものとして山口県立文書館蔵『平家語本』などがあり、『秦音曲鈔』と『平家語本』の間に直接の親子関係を認めがたいことからみて、なお他にもいわゆる波多野流譜本とは異った譜本の存在が予想されるという。これらの譜本は、種々の点からみて波多野流譜本の古態を示すもののようで、このことから、著者は、一般の常識に反して、波多野流の初期には、存外に多様な譜本がおこなわれていたのではないかとされる。そうであれば、このことはまた、同時に「波多野流は最初からふるわなかった」という従来の波多野流についての見解に訂正を求めることにもなる。このような多様な譜本を産み出す改訂のエネルギーは、流派の活況と無縁ではなかったはずとするのである。『秦音曲鈔』という特異性の目立つ波多野流譜本の発見を契機にして、このように波多野流についての従来の見解を著者はことごとに塗りかえてしまう。

第一章は、『秦音曲鈔』の紹介を中心に、その史的意義を説くことにあったが、このように従来の波多野流についての見解に根本的に抵触するところがあるとすると、波多野流について全面的にみなおす必要が生じてくる。第三章「波多野流譜本の史的変遷」は、そのような必要から、流派の（譜本の）変遷に視点を移して、あらためてこれを論じ直したものである。便宜、三章について先に触れれば、波多野流譜本は、一般の理解に反して、その初期は思いのほか多様であったことをさらに多方面に手がかりを求めて詳説する。山口県立図書館蔵『小秘事』は、「文化八年成立の前田流の小秘事」というような紹介が以前なされていたわけであるが、曲節標示、譜記面その他からこれを否定して、元文頃以前の成立になる波多野流の古譜本で、『秦音曲鈔』などと共に、初期波多野流譜本の多様性を示す貴重な文献とされる。これもまた、いわゆる波多野流譜本と比べると特異性の目立つ文献なのである。特に、いわゆる波多野流の小秘事譜本が「祇園精舎、延喜聖代」のほかに「善光寺炎上」の句を含むのに対して、この山口本小秘事は、前田流の小秘事と同じく「善光

寺炎上」を含まない二句になっている。曲節標示、譜記面等にみる波多野本的特徴とこのことはいかにも矛盾する事実であるかのように見えるが、著者は、このことは、かえって山口本の古態性を示すものであろうとする。波多野・前田両流分岐以前の秘事物は、原則として「剣・鏡・宗論」の三句が大秘事、「祇園精舎・延喜聖代」の二句が小秘事という様に決っていて、波多野流も前田流と袂を分った当時は、それをうけついだ可能性が大きいという。もつれた糸をときほぐす手並は、まことにあざやかというほかはない。（第二節）

さらに、波多野流節名目の類には、同文同譜とされるいわゆる波多野本諸本には見ることのできない特異な節名目がすくなくないが、これをすべて架空の節名目として無視してしまうことができないとすれば、後には失われた古譜本の存在がここからもやはり推定できるはずとする。（第三節）、また、詞章の面からも一定の推定は可能とされる。すなわち、波多野流諸本と流布本平家物語の間には共通性が相当著しいが、それでも一致しないところがないわけではない。しかし、それも古く溯れば両者の密接な関係は増す傾向にある。もともと「直接的相関性と言うべき酷似性」が波多野流古譜本と流布本の間にあり、波多野流の詞章改変によってやや両者の間に隔りが生じてきたという経緯が考えられ、それからすると『秦音曲鈔』などより更に古い波多野流譜本の存在も想定されるという。（第四節）ここには、前田・波多野分岐当時、波多野流がいわゆる流布本派の中心勢力であったという流派自体のおかれた状況との関連がある程度重視されているともいえるが、譜本の変遷を考える上では当然必要な視点といえよう。第一章において、初期波多野流の平曲家の系譜を『三代関』などによって再構し、「波多野流は最初からあまりふるわなかった」とする通説を否定し（第二節）、あるいは他流派から波多野流へ転向するものもすくなくなかったことを明らかにして（第三章、第六節）その盛況であったことを説かれる。そしてこのことと初期波多野流譜本の多様性は無関係ではなかったであろうとされる。また、前田流にくらべて、波多野流の曲節付けは、音楽性の著しい革新性に富んだものであるが、このこともまた流派の盛況と無関係ではなかったろうとされる。譜本と流派自体のありかたを相即的にとらえることで、変遷そのものが明確になるだけでなく、事実解釈の信頼性をより確かなものにしているといってよいであろう。（その初期に、前田流にくらべてはるかに革新的で、多様な様相を示していた波多野流が「同文同譜」といわれるような極端な保守化の道をたどり、むしろ前田流の方が後には多様な様相を示すようになるのは、こうした観点から言えば、流派の活況の有無、盛衰と関係するということになるのであろう。）

第四章「波多野流平曲と前田流」は、表題のとおり、両流の交渉の問題をとりあげ、特に荻野知一検校の『平家正節』編纂にあたって、波多野流（譜本）が相当の影響を与えたことを明らかにする。

論述の都合で、ふれずに来た第二章「国語学資料として見た秦音曲鈔」にここで帰ることにしたい。本書ではじめて全文が影印紹介されることになった『秦音曲鈔』は、叙上のように平曲史の上からきわめて注目される文献であるが、国語史資料としてもいろいろ注目されるところが多い。第一節～第三節は、本書に豊富にみられる「スム」「ハナ、ハナニ」「ツメ」「分」などの発音注記について、第四節はアクセント史料としてみた譜記の性格について考察する。

「スム」注記については、前著『平曲譜本の研究』第九章に相当

詳細な研究があるわけであるが、「スム」注記の意味を前著では「平曲伝承の初期に清音であったものが、譜本当時の中央語で濁音形が普通になっていた」とみなす方向が主として強調されていたが、ここでは「かってその語形に清濁関係の揺れがあったことを示す」というようにすこしそのトーンを落されている。「スム」注記には、単純な新古関係を背景においた場合だけでなく、「平曲伝承音自身に清濁両形があって、この場合、その清音形の方をよしとした」とか、新古は別にして単に「清濁両形の揺れを語るもの」といったようなものもあるというように、原則論だけで処理しきれないものがかなりありそうだということによるものであろう。「類似語形との区別のため」という横の関係の場合もありうるという指摘は、たしかに考えられることで、「スム」という注記がそれほど単純でないことが思われる。（前著であげられた「男」「万宝」なども この類といってよいのであろう）

その他、この書には、他譜本であまり見られない「ハナ、ハナニ」「分」などの注記がみられる。前者は、他本の「ノム」に、後者は、「ワル」にあたる。本書の「ハナ、ハナニ」と「ツメ」は、他本の「ノム」「ツメ」の対立にあたるわけであるが、他譜本に比して、この文献の方がその区別がすっきりしているという。（ただし、前著で明らかにされた「ヤ行音の直前促音は、ツメではなく、ノムになる」ということは、本書の場合、「御出より」（ハナ）がヤ行直前促音の唯一の例のようで、この場合すっきりしているとまでいえるかどうかやや心もとないようにも思う。）「分（ワル）」は、この文献の場合は、イウ連母音に限られる。以上の諸注記例は、それぞれの節末に整理されている。前著の発音注記例一覧とあわせて、本当に手軽に平曲の発音注記を参照できるようになったわけでありがたいことである。

第四節「アクセント史料として見た譜記」では、アクセント史料としての観点から『秦音曲鈔』の譜記の特色を明らかにする。この節はあるいは、前著に対する書評（国語学126、131）の一部に答える意味もあったかもしれない。

第二部は、山口県立図書館蔵（多賀神社文庫旧蔵）『秦音曲鈔』十二巻二十四冊の影印で、上下二段、一段に二丁づつを収める。縮刷のため、注記の文字がやや小さいが、印刷は鮮明である。

本書は、当然のことながら、前著『平曲譜本の研究』とあわせよむことで、よりよく理解されるであろう。

（昭和六十一年六月、勉誠社、三八〇〇〇円）